

昭和63年5月9日～14日

奈良絵本

室町時代末期から江戸時代初期にかけて、中世小説（御伽草子）を主として描いた絵巻、絵本が作られた。これらは一般に奈良絵本と呼ばれている。

しかし、これら奈良絵本の様式は一定でなく、素朴で民芸的なものや精緻で細密画の趣を呈するもの、あるいは形式化の進んだ表現法をとるものなど多様である。今回は、本学所蔵の奈良絵本類のうち比較的古い製作になる善本を展示する。

- 1 住吉物語 写本 二巻 (常磐松文庫)
紙高25.4cmの卷子本。牡丹唐草模様金欄表紙。平安時代に成立し、鎌倉時代に改作された擬古物語で、いわゆる継子いじめの物語の典型として知られる『住吉物語』の絵巻化。極彩色絵入り。室町末期頃の書写にかかるものであろう。
- 2 住吉物語 写本 四巻 (常磐松文庫)
紙高16.5cmの卷子本。青地雲に飛鳥模様緞子表紙。無題。彩色絵入り。これも『住吉物語絵巻』の末流の異本。江戸初期頃の書写。
- 3 蓬萊山 写本 二巻 (常磐松文庫)
紙高25.4cmの大型卷子本。金欄表紙。極彩色絵入り。蓬萊山の致景の数々と由来とを述べ、さらに、紀伊国名草郡の漁師あづみの安彦の蓬萊山往還登仙の経緯を述べる祝言もの。本文は赤本文庫本と同内容だが、同本の第五・六・七図が該本にはなく、第十・十一図の内容に出入りがあるらしく、また絵の位置が互いに相違するなどの異同がある。江戸前期書写。

- 4 さごろも 写本 三冊 (常磐松文庫)
紺地藤たすきに花菱紋金欄表紙。列帖装。美濃本。極彩色挿絵入り。下巻巻末に『居初氏女書画』とある。平安時代の『狭衣物語』の構想の一部を借りた翻案もの。狭衣大将と飛鳥井姫との恋物語で、諸本間で構想に大異がある。江戸時代前期の書写か。なお本学黒川文庫には本書と異本関係にある、承応三年(1654)写の『飛鳥井大しゃうさうし』もある。
- 5 たわら藤太 写本 二冊 (常磐松文庫)
横本。金銀泥絵表紙。袋綴。彩色絵入りの奈良絵本。具引き料紙を使用。有名な俵藤太藤原秀郷の武勇伝説に取材したお伽草子で、百足退治・龍宮往還話、将門追討話から成る二部構成。ただし、本書の上・下巻の境目は物語の段落と完全には一致しない。本文は版本と同類の流布本系。絵はそれほど稚拙ではないが、版本のそれと点数・構図を同じくし、さらに簡略な図柄となっている。版本あるいはその親本となった本に基づく写しではないかと思われる。江戸前期写。
- 6 花鳥風月 写本 二冊 (常磐松文庫)
横本。紺地金泥絵入り表紙。彩色の稚拙な絵は物語の内容とは無関係で、しかも順不同ながら、ある単一作品の挿絵(原話未詳)が誤って添付されたものである。本文は、西山薬室の中納言郎での扇合わせの絵の不審から、口寄せの上手花鳥・風月の姉妹が招かれ、業平・源氏の霊を口寄せして、伊勢・源氏の物語の秘伝を説きつつ絵合わせをするというもの。本文系統は版本系。江戸前期頃の書写か。
- 7 つれづれ草 写本 三冊 (常磐松文庫)
紺地菊唐草模様縦箔表紙。半紙本。列帖装。金泥絵入り鳥の子料紙。鎌倉後期から南北朝期にかけて活躍した遁世者の歌人、卜部兼好の随筆『徒然草』の淡彩絵入り本。箱書に『住吉具慶絵』と言うが、何に

基づく説かは不明。江戸前期頃の書写であろうか。本文自体はとくに通行の流布本と大差ないようであるが、絵はなかなか雅趣にあふれる。

- 8 栄華物語 写本 三冊 (常磐松文庫)
青地分銅繫ぎ模様緞子表紙。袋綴。大本。色替り料紙・極彩色挿絵入りの美しい本。平安時代後期成立の歴史物語である「栄華物語」の特異な異本。「月の宴」「花山たづぬる中納言」「さまさまのよるこひ」の三巻。本文は流布本系か。江戸初期頃の書写。
- 9 おちくぼ 写本 三冊 (常磐松文庫)
紺地金泥絵表紙。袋綴じの大本。題簽に「春之上(中・下)」と巻序を記す。次本(10)ととも一揃いで、春夏秋冬の計十二巻が原態であったらしい。極彩色の挿絵入りで、その大半が見開き頁という豪華本。継子いじめの物語で、室町物語を代表する大作。奥書等はないが、江戸初期頃の書写と思われる。いわゆる「落窪の草子」(小落窪)とは別本だが、いずれも平安時代成立の「落窪物語」の翻案ものとしては同類。本書は該本と次本のほか、アイルランドのチェスター・ビティ図書館に夏之上・中巻が現存するなど、巻の異なる若干の残欠本が報告されているのみで、他に伝本の存在を聞かない稀覯本。
- 10 おちくぼ 秋上 写本 一冊 (常磐松文庫)
前本(9)と同装丁でもと一群。秋の上巻のみの零本。
- 11 わか草 写本 三冊 (常磐松文庫)
紺地金泥絵表紙。大本。袋綴。金泥絵・地紋入り鳥の子料紙に極彩色絵入りという美しい本。嫁いじめもので、父大納言の反対を押し切って従姉妹の若草と結婚した少将が、清水観音の利生により一族もろともに繁栄するという物語。悲劇的結末の天理本以下の別系諸本に対し、慶応大学本と同じ祝言色の濃い特殊な内容の異本で、しかも挿絵を欠

く同系本に比してより古態をとどめた善本。江戸前期書写。

- 12 ゑぼしおり 写本 三冊 (常磐松文庫)
横本。彩色雲形表紙。袋綴。奈良絵本仕立ての幸若。源義朝の子九郎御曹司半若が吉次に従い奥州へと東海道を下る途中、近江鏡の宿で自ら元服した際に、今は烏帽子職人の妻となっている旧臣鎌田正清の妹夫婦に出会い主従の名乗りをし、美濃青墓の宿では亡父兄と旧知の遊里の長者に対面し長者の祀る亡父兄の霊前に通夜して霊夢を蒙り、その告げにより、その夜に宿を襲った強盗熊坂の長範一味を退治するという内容。本文は版本系。挿絵も稚拙で江戸期の風俗を反映する。江戸前期書写。
- 13 お伽草子 写本 九種二十二冊 (黒川文庫)
横本。紺地金泥絵表紙。袋綴。具引き料紙。やや稚拙な彩色絵入り本。江戸前期から中期頃の書写にかかる末流の奈良絵本。全文の本文が一筆であるらしく、挿絵の筆致もまた共通している。九点というのは数が半端であり、本来はもっと点数が多かったと思われる。後述の「いわ屋」の署名からは江戸後期の国学者として知られる屋代弘賢の手沢本であったことがあきらかであるが、それ以前の伝来・系統は不明である。以下作品別に記す。
- いわ屋(三冊)「落窪物語」型の継子いじめもの。古本系の本文。屋代弘賢が他本と校合したらしく、下巻巻末に本文とは別筆の同人の署名入りの本文考証がある。
- むばかわ(一冊)「鉢かづき」型の継子いじめもの。諸本大差無し。
- こわたきつね(二冊)異類婚姻もの。版本と大差ない本文。
- ささやき竹(三冊)古い系譜を持つ恋愛物。版本と同系の本文。
- 中将姫(三冊)継子いじめものの中将姫一代記。広島大学本などと同系。
- つき島(三冊)平曲もの。大頭系の幸若と同系の本文か。中巻第四

・五図の分の見開きが白丁になっており、絵に関する注記などがある。

つるのさうし（三冊）異類報恩・婚姻ものの難題もの。版本と同系の本文。上巻の末に「此主なか」などの旧蔵者書き込みあり。

ぶん正（二冊。ただし中巻欠）版本と同系の本文。

ほうらい山（二冊）版本と同系の本文。

-
- 14 それぞれ草 版本 一冊 (黒川文庫)
乙州著 川島叙清画 正徳五年(1715) 京都 菊屋七郎兵衛刊。
『徒然草』にならい237段に分けて処世訓的随想を記したもの。
- 15 伊勢物語 版本 二冊 (黒川文庫)
慶長十四年(1609)刊。川瀬一馬氏によって嵯峨本第三種とされているもの。薄茶色の地に青と茶で水模様を描いた紙表紙。袋綴。美濃本。光悦流書体の古活字本。片面9行。1行約16字。雲母引き鳥の子料紙を用いる。「光慎」「幽真閣図書館」「筒井蔵書」等の旧蔵印あり。
- 16 さごろも(御伽草子) 版本 二冊 (常磐松文庫)
美濃本。十五行書き。色刷り挿絵。寛文五年(1665)。松会開板。松会本とは、明暦・寛文頃の幕府御用書肆より出た古い版本をいう。
- 17 吉原源氏五十四君 写本 一冊 (常磐松文庫)
四国太郎(其角)作 浅茅の尼序 貞享四年(1687)。江戸吉原の太夫・格子五十四人の容姿や性格・技芸・接客態度などを記した遊女評判記で、「源氏物語」の五十四帖になぞらえた命名である。原本は三谷(幕府の御用達であった三谷家であろう)に伝えられたもので

あるが、現存しない。今日流布の伝本(国会図書館、京都大学、及び本学)は、柳亭種彦本を祖本としている。実践本は第一丁を欠くが、現在知られる最良本である。師宣風の挿絵が入る。

- 18 芝居番付 一紙 (近世文芸資料)
明和二年(1765)四月十日より京都四条南側で興行された「鴨長明四季物語」の芝居番付。座本は沢村国太郎。
- 19 芝居晴小袖 版本 一冊(江戸) (近世文芸資料)
役者評判記。横本。正徳六年(1716)四月 京都 八文字屋八左衛門刊。『役者口三味線』(元禄十二年 八文字屋八左衛門版)以降の定形化した形式を踏襲し、黒無地表紙、小型横綴本、京都・大坂・江戸の三都の芝居に各一卷を当て、三都三卷三冊の編成になる。内容は、役者目録、開口(序文)それぞれの役者の位付・紋・役者名に続いて合評形式の芸評がなされ、上演図等を入れる。八文字屋版の初期の挿図は、西川祐信が担当した可能性が高い。
- 20 役者大福帳 版本 一冊(大坂) (近世文芸資料)
役者評判記。横本。宝永八年(1711)三月 京都 八文字屋八左衛門刊。『秋葉蔵書』(秋葉芳美)の蔵書印あり。
- 21 当世銀持気質 版本 二冊(二、三) (常磐松文庫)
永井堂亀友作 明和七年(1770) 京都 菊屋安兵衛ほか刊。
銀持の盛衰をとりあげた浮世草子末期の気質物。
- 22 役者似顔画早稽古 版本 一冊 (近世文芸資料)
十返舎一九序 歌川豊国画 文化十四年(1817)序 江戸 鶴屋喜右衛門版。役者似顔絵の描き方を教えたもの。

23 下界図絵 版本 一冊

(近世文芸資料)

東西庵南北作 勝川春扇画。中本。文化八年(1811) 江戸
若狭屋与市刊。真上から眺めたら、下にあるものはどの様な形に見える
だろうか。そんな疑問に答えた絵本である。最初に真上から見た図
を描き、次の頁にそれを横から見たシルエットを示している。全部で
十五丁から成り、草双紙の体裁をとっている。見立絵本とよばれるも
の。

24 即席庖丁 版本 一冊

四季山人著、版元不明。小本。口絵を歌川国芳等、多くの画家が描く。
口絵の一つに「八十九歳卍筆」とあるので、葛飾北斎八十九歳の絵と
知られる。よって嘉永元年(1848)の出版である。著者の四季山
人は、文政五年(1822)に没した式亭三馬が四季山人を名乗って
いるので、あるいはその子の式亭小三馬であろうか。本書は幸田露伴
の『古今料理書解題』に「即席素人庖丁」として紹介されているもの
である。序文に「此庖丁の調方は、名に負ふ土橋の不老亭(平清)、
浅草の駐春亭、両家の口授を其儘に」と、その当時の有名な料亭の献
立を元にしたかの様に記すが、露伴のいうように、在来の書を折衷し
て作ったものであろう。